

---

高橋美由紀

『在郷町の歴史人口学』

——近世における地域と地方都市の発展——

ミネルヴェ書房 2005.5 ix+7+311 ページ

---

本書は、近世の一在郷町として発展した郡山町の、自然増加と社会増加に焦点を当て、人口増加の要因とプロセスを解き明かすことを試みた、「在郷町」は「支配上は農村に立地しながら都市的要素を持つ」と定義される。周辺からの人口を吸収しつつ、自由な経済活動が展開される、若く活発な中小都市である。ミクロ史料をベースに、歴史人口学的なアプローチから郡山の人口変動を把握し、そこに暮らしていた人々の様子を描き出すことが本書の中心課

題として据えられている。博士学位論文をベースとし、多彩な資料とデータベース操作を駆使し、多角的な視点からのアプローチをめざした意欲的な書である。

本研究には少なくとも四つの意義がある。第一に在郷町という、中小都市に着目した点である。これまでの日本の歴史人口学研究は、農村、あるいは大都市・城下町の研究がそれぞれ別個に蓄積してきた傾向がある。その中間的存在であり、農村から都市へと発展した在郷町への視点は新鮮である。周辺農村において人口減少が進む中で、なぜ郡山のみが人口増加を続けていったか、という人口学的な謎への挑戦が非常に興味深く、示唆に富んでいる。第二に、マイクロ史料の活用である。陸奥国安積郡郡山上町(1687-1870年)の戸別改帳を主な史料とし、死亡、結婚、出生、移動、世帯についての詳細な動向を示した。特に移動については、西欧の歴史人口学では決して追えないイベントであるだけに、日本の歴史人口学史料の特長を大いに活用したといえよう。近隣農村からの流入のみならず、越後国蒲原郡からの引越者が郡山町へ取り込まれていく過程の解明には歴史人口学の醍醐味を感じる。第三に、都市が周辺地域の人口を吸収して人口を維持していたとする「都市蟻地獄説」に、著者が「移動」の要素を取り入れて解釈しなおした点である。郡山が、自然増加の正を保ち、社会増加によって人口増加を図っていたという、在郷町に特異な人口メカニズムの発見は非常に重要である。第四に、二本松藩がとった「赤子養育仕法」などの出生奨励政策と合計特殊出生率との関連をめぐる分析は、少子化対策に迫られる現代の日本にも示唆が大きい。

次に、これらの特長を確認したうえで、本書への疑問と気になった点を論じたい。まず、本書の中心的理論のベースとなっている、都市蟻地獄説(都市墓場説)である。都市蟻地獄説は、実際のデータによる裏づけが不十分なまま通説化される(p.71)と筆者は述べ、「墓場でない若い活発な在郷町(p.79)」を印象付ける、様々な解釈を試みている。しかし、残念ながら、本書の分析さえも、十分とはいえないだろう。乳児死亡率の推計が試されているが、他の都市のレベルより低いと断定するのは早急すぎる。移動については、在郷町に、農村から移入してきて、定住するものと、帰村するものと二つのタイプがあり、元気な成功者が前者で、後者は健康を害したから、また、高齢になったから帰村するという議論が展開されている。しかし、ここで示されたのは、一農民(大槻村三助)の事例だけで、身請け・帰村が多いことはわかっていても(表2-3)、帰村者ゆえに農村の

死亡率(特に高齢者)が高いという論拠には至らない。たとえそれが裏付けられるとしても、理論的に、都市で健康を害したものが、農村で死亡するという構図は、速水融による、「都市奉公経験者は、未経験者よりも死亡率が高い」という美濃国安八郡西条村での発見に共通するものであり、むしろ蟻地獄説を肯定することにつながるのではないか。実際、評者の(イベントヒストリー分析によって他の要因をコントロールした)推計によると、女子老年層以外、男女とも村外に長く出ているものほど死亡確率が高い。

また、著者の引用する斎藤修の研究が指摘するように、人口統計値の水準が異なることも考慮にいれるべきではないか。第2章で比較の対象となっている下守屋村・仁井田村をベースに死亡確率の研究をした Tsuya and Kurosu (2004)によると、両村の死亡率は最高値といえないまでも、先行研究の示す村々の死亡率のなかで、非常に高いグループに位置している。それゆえに、単純に他の都市と農村の比較値と比べるだけでは意味がないのではないか。郡山町が健康か否かの解釈には、周辺農村の死亡率の相対的な高さを考慮しなくてはならないだろう。

しかし、これらの指摘は、著者の強調する郡山町と周辺農村との人口学的つながりを否定するものでももちろんない。たとえば、下守屋・仁井田村では(前掲論文)、飢饉時に「座して死をまたず」サバイバルのために移動確率が上昇することが明らかになっている。飢饉年にこのようなサバイバルのための選択肢を求めて郡山町への流入が増加したことは大いに考えられる。これが郡山の飢饉時の死亡率を押し上げたという流入者の選択性の議論(p.53)は、今後両サイドをつなぐアプローチが必要であることを示している。

第二に、上記に特長としてあげた郡山町周辺の村々との比較である。本書で示されたのは大槻村上町、下守屋村、仁井田村である。特に下守屋・仁井田村戸別改帳を活用した実証研究を進めている評者にとっては非常に興味深いものであった。しかし、その比較の仕方が散発的である。粗死亡・出生率の対比には仁井田村、年齢階層別死亡率には下守屋村、結婚状況は大槻村上町と下守屋村、また労働の供給側サイドの様子をみるために、大槻村上町、下守屋村が調査されている。データの活用できる村々の情報が活用されたのであろうが、その比較の理由が便宜的で利用の仕方が系統だっていないことが残念である。貴重な史料が利用できるだけに、比較の意義と目的を明らかにした上で、系統だった方法を利用してもらいたかった。それによって煩雑な図表をかなり整理できるのではないか。

第三にモノグラフなればこそその、系統的かつより詳細な分析が今後の課題であろう。周辺農村との比較と人口移動にこだわるあまりか、郡山自体の死亡、出生、結婚、移動のメカニズムの解明、そしてそれら相互の関係への探求がしつくされていない。時代の変遷、経済階層、ジェンダー、郡山出身者・移入者など重要な分析軸から、郡山の人口を系統的に分析することは、近世後半の東北地域のなかで、人口増加をとげた郡山を包括的に理解するために必要と思われる。また、郡山の労働市場を探るために、近隣農村からの労働供給パターンを明らかにしたこと、ジェンダーによる違いを浮き彫りにしたことなどは興味深い、その分析方法に疑問が残る。第6章で示された重回帰分析は、著者が強調している時系列的变化や人別帳ならではの詳細情報もモデルに組み込まれていない。郡山自体の需要側サイドにどのような変化が生じていたのかも示されていないことも残念である。労働需要側として提示された第7章の分析は、多くの奉公人を抱えていた有力者の世帯数件に限られている。郡山の人口増加が引越しゃ店借による労働者の移入であるという著者自身の人口学的発見を鑑みれば、それを可能にした郡山市場全体の分析があってもよかつたのではない。同様の理由で、第8章の世帯分析が長期間連続する世帯のみを取り出しているのも納得がいかない。もちろん、郡山という町場においても直系家族規範が垣間見られたことは重要であるが、借家や、水呑という立場から、どのように町場に組み込まれていくかという再生産市場をみるためには、短期間で消滅した世帯も含んだすべての世帯をリスク人口として取り扱う必要があるだろう。さらに、第7章の「家族戦略」は有力者家族のみであり、結婚・養子を取り入れた継承戦略は興味深い、それが有力者に限ったものであったのか、下層では継承戦略を展開する必要性がなかったのか、それとも継承戦略を展開するには経済的あるいは人口学的制約があったのかなど、よりダイナミックな都市の家族戦略を分析することができるだろう。そこに農村とは異なったオプションがあったのか、人口再生産につながる方策があったのか、大いに興味がわく。

このような様々な疑問が出てくる刺激のある研究書であり、今後の研究の発展に大いに期待したい。特に三つの発展の方向性が注目される。まず、近世中小都市の分析地域を拡大し、人口・世帯動向とそのメカニズムを分析していくことである。国内においても他地域の在郷町の研究はめずらしいとはいえ皆無ではない。また、農村から都市へと発展した点において「在郷町」は日本特有と考えられがちであ

るが、他諸国における中小都市やプロト工業化を経験した地域との比較においてその特徴がより明らかにできるのではない。次に、イベントヒストリー分析を利用した郡山周辺農村の研究が進んでいる。郡山についても、良質かつ時系列的なデータを活用し、多変量解析を施すことによって、本書の目的とする人口増加のメカニズムについてのより明確な因果関係が探求できるであろう。もちろんそれには、分析用のフラットファイルの作成から取り組みなおさなくてはならないが、その価値と意義が十分にあると思われる。最後に、在郷町と周辺農村の地域ダイナミックスの研究が大いに期待できる。著者が先鞭をつけた、郡山と周辺農村とのつながりについて、両者データからの厳密な分析が可能であろう。速水融氏のもとで本書の利用したXavier データが構築されてから四半世紀、古文書の解説からはじまった二本松藩人別改帳を利用した体系的な歴史人口学研究は、人口減少社会の現代にも大きな示唆があるに違いない。

#### 参考文献

- Tsuya, Noriko O. and Satomi Kurosu (2004)  
 "Mortality and Household in Two Ou Villages, 1716-1870," pp. 253-292 in Bengtsson, Tommy and Cameron Campbell and James Lee et al (eds.) *Life under Pressure : Mortality and Living Standard in Europe and Asia, 1700-1900*, MIT Press.

[黒須里美]